継国縁壱は勇者にあらず

立花・無道

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

理の外に生まれた少年は、勇者でなくただの人だった。

西暦の終わり、少年と勇者たちの紡ぐ物語。

少年は神の使いを眼にした日、自らの生まれた意味を知る。

目　次

つぎくによりいち　1
こおりちかげ　5
のぎわかば　12
どいたまこ　19
いよじまあんず　28

つぎくによりいち

その子は捨て子だった。
高知県のとある神社でその子供は捨てられていた。
布にくるまれて、敷地に置かれていた子供を拾ったのは、神主だった。
額の左側には炎にも似た痣があり、捨てられた子供自身はそれが捨てられた理由だと思っていたが、真実はわからない。
継国の姓は神主夫婦のもので、縁壱の名は1つの縁という意味で夫婦が贈った名前だった。
名に壱の字があてがわれたのは、義理の母と呼ぶべき人が古風な響きを好む人物であったためだ。

夫婦は穏やかな人達だった。
縁壱は昔から声を発することがなかったため、両親は耳が聞こえないと思っていたが、子供のいない両親にとって、縁壱はそれでも愛すべき子供であった。
宮司である祖父や祖母が生きていたこともあり、縁壱は幼稚園や保育園にも通うことはなかった。
だが、読み書きや道徳はしっかりと教えてくれる。
そんな温かい家族だった。
6つになってしばらくして、縁壱が「家の手伝いをしたい・・・」と口にすると、家族や親族は非常に驚いた。
耳が聞こえないと思われていた縁壱が声を発したことを心から喜び祝福したのだ。
迷惑をかけていたにも関わらず、自分のことのように喜んでくれた家族に、縁壱は幼いながらに大きな恩義を感じていた。

その後、もうすぐ小学校に上がる縁壱に、両親も良い機会だと軽い手伝いを許可したが、両親の思惑に反して毎日のように働いていた縁壱は、数日間の休みを言い渡され、手伝いの時間を決められることに

なった。
神社の掃除や軽い荷運び、近所へのお使いなど、小学校に上がる前に縁壱はできることを何でもやった。
縁壱は、幼い頃から両親と血が繋がっていないことを自覚していた。
だからこそ縁壱は義理の家族に、捨て子だった自分を愛してくれた恩を返そうと必死になったのだ。

そして月日は流れた。

小学校に上がり周りからなぜか一線を引いたような対応を受け、友人と呼べる人間はいなかった。
だが、苦にはならず、私は家族との幸せな日々が続くのだと思っていたある日のことだ。
父に連れられたてきた神社の関係者の集まる集会。
高知県西側の宮司と神主など神社の代表が一堂に会するそれは、数多く存在する神社の中で規模の大きい神社が持ち回りで場所を提供するらしい。
「着いたぞ、縁壱。」
そこは、のどかな村だった。
道路を真ん中に置いて田圃が広がり、そこから舗装されていない砂利道へ続く道があった。
民家までかなりの距離があり、父は私を気遣いながら歩いてくれたが私は疲れを感じることがなかった。
この時の私は、なぜ自分が疲れないのか疑問を感じることなく父を追って道を歩いていた。
「ここが今日の宿だ。父さんは荷物を置いたら明日の集会に向けて、

神社に挨拶をしてくるから、縁壱は村を散歩してくると良い・・・ あまり遠くに行ってはいけないよ。」
父の言葉に返事をする。
その後、父がいなくなってから私はいつの間にか駆けだしていた。
なんとなしだった。
私の育った場所は、都市に近い場所にあり舗装されていない道を歩くことはなく、田圃や小川を見ることすらなかった。
美しいと感じた。
この世界は美しく、今歩いている場所の青い空と緑あふれる景色はどこまでも広く、私などとてもちっぽけだ。
宿からはあまり離れない様にと動き回っていたが、私はどれだけ動き回っても疲れることがなかった。

その後、宿に戻ろうと、川に沿って歩いて橋の下を通ったときに、私はある少女と出会った。
同じ年ごろであろう少女は誰にも見つからないような橋の陰で、両脚の膝を両腕で抱え込み座り込んでいた。
少女は腕に傷や字があった。
私はその傷や字が全身にあることも、自らの眼で視てわかった。
「何をしているんだ?」
少女はこちらを見ることもなく、口も開くこともない。
私を認識していても、気に留める気はないようだった。
私は少女からわずかに離れた場所に座り、少女の返答を待った。
少女の返答を待ったことに理由はない。
そのまま、小一時間座り込んで待っている間に日は暮れ始めた。
「家に帰らないのか?」
そう問いかけた私の声に対して、少女はさらに身体を丸め込んで、しばらく黙り込んだ。
「・・・ 帰り・・・ た・・・ ない・・・」
そう言って少女は、泣いた。
少しの間、声を抑えるように少女は泣いていた。

涙を流すほどの理由を聞けるほど、私と少女は親しくなかった。
さらに、幼い私には何が正しいのか、何が悪いのかなどわからない。
だが、私は帰りたくないと泣いてまで口にする少女を、家にこのまま帰すことが正しいことだと思えなかった。
「じゃあ、俺と一緒に宿に行こう。」
「・・・ えっ？」

濡羽色の美しい髪の少女だった。
少女の名は、郡千景という。
「群」ではなく、「郡」である。

この時の私の行動は褒められたものではない。
父からは怒られ、彼女を困惑させてしまった。
だが、その後千景は継国家に引き取られることとなる。

彼岸花の勇者と理外の天才はこうして出会いを果たす。

こおりちかげ

神様なんて信じていない。
父は自分勝手で責任感などない、子どものような男だ。
母はそんな父に愛想を尽かして、若い男と不倫した。
そんな両親から生まれた私は必要とされず、故郷の皆からの軽蔑や憤りを一身に受けた。
母はもう家にいない。
父も夜遅くまで帰ってこない。
学校にも故郷にも、居場所などない。
それでも、地獄(こきょう)にいなくてはならない。
居場所がなくても、家がある。
雨風を凌げるだけの場所と自分の好きなもの(ゲーム)だけはある。
私はそれだけの理由で、現在(イマ)を生きていた。
そんな生き方が変わったのは、彼との出会いからだった。
神様なんて信じていない。
だけど、彼と出会ったことが神様なんてもののおかげなら、感謝くらいはして良いのかも知れない。

「何をしているんだ?」
問い掛けられた時、最初に見つかったと思った。
だが、そこに居たのは村では見たことのない服装の少年だった。
だから安心して、そのまま無視を決め込んだ。
そのうち、飽きていなくなるだろうと考えての対応だった。
だが、思い通りにはいかず、少年はそのまま隣に居座って呆けるように、ただ座っていた。

不思議と恐くはなかった。
「家に帰らないのか？」
落ち着いた静かな声だった。
村の子どもは勿論、大人たちなど比較にならないほど、少年は大人びたような雰囲気を纏っていた。
だからだろう、安心して少しだけ気が緩んだ。
目に水が溜めっていく実感があった。

泣いても助けてくれない。
叫んでも助けてくれない。
だから閉じこもって我慢した。
ゲームに没頭して、他の全てを拒絶した。
それでも限界だったから、誰もいない場所に来た。
村からそれなりに離れている橋の下、この橋を渡れば山道に入る。
その先には、他の村や町がある。
私を誰も知らない場所がある。
行きたくて、私はその後に死んでしまうだろうから行けない。
ここにいても、その内死ぬけれど、死ぬのは遅い方が良い。
死ぬのは嫌だから・・・ だから、いつも結局帰りたくもない地獄（じごく）の家に帰るのだ。
「帰り・・・ たくない・・・」
ポツリとこぼれた言葉に涙が溢れてくる。
少年はどうともせずにしていたが、それが私にはありがたかった。
「じゃあ、俺と一緒に宿に行こう。」
「・・・ えっ？」
彼が口にした言葉に呆気にとられる。
その時に私は顔を上げて、初めて彼の顔を見た。
額の真ん中で別れた髪、特徴的な逆さまな炎のような左額の字を持っている。
表情から感情は読み取れず、それでも伸ばされた手とこちらを真直ぐに見つめる瞳から真剣さと本気さが見て取れた。

だからだろうか、私は自然に自らの手を伸ばし、彼の手を握っていた。
そして私は久しぶりに、誰かに手を引かれたのだ。

彼に手を引かれ、当然のように背負われた私はそこから理解が追い付かなかった。
彼が駆けるのは山道や林道、舗装されている道、わずかに荒れている道をひた走る。
私を背負っているのに、彼のスピードが落ちることがなくもう数十分は走り続けている。
「貴方！何者なの!?」
「私は継国縁壱という・・・」
ちがう！そうじゃない！と言いたいのをこらえて、私は自分の名前を彼に教える。
彼は走る間に話していても、全く息切れをしている様子がなかった。
さらに彼は、私が驚いていることに不思議そうにしており、根本的な部分での大きな食い違いを感じた。
今の速度と体力は、彼にとって当たり前のことで、私や他の人にとっては考えられないことである。
そして、それを彼は理解していない。
伝えたほうが良いのか迷っている間に、疲れていたからか、彼の温かさを感じたからか私はいつの間にか眠ってしまった。

『お前が生んだんだ！お前が責任を取れ！』
『ふざけないで！普段何もしないで遊び歩いてたくせに！こんな時だけでも役に立って！』
言い争う声で、夢を見ているとわかった。
あの時、母が家を出る前夜に聞いた言葉だ。
離婚を行うためにはどちらかが子供を引き取る必要があるらしい・・・
だが、私の両親は私を引き取ることをどちらも望まなかった。
考えてみれば、当然のことだった。
父は自分が楽しければいい、母は自分が不倫相手と一緒になれればいい。
２人にとっての幸せに私は必要がない、それだけの話。
私は自分の部屋で、ずっと耳をふさいで耐えた。
まるで押し入れに押し込められているような感覚・・・
私が、とても長いと思っていた罵りあいは、実際には３０分にも満たないほど短い時間だった。
その間、ひたすら自分が必要のない存在かを口にされ続けた私は、もう生きる気力がわいてこなかった。
その後、母は家を出て、父は酒浸り、私は悪意に心を殺され続けた。
だが、それでも私は生きていた。
辛い、苦しい、死にたい・・・・・　だけど死にたくない。
生きる理由はない、生きる気力もない。
なのに死にたくないのはどうしてだろう？
まぁどうでもいいことだ。
ゲームをしよう。
それで、他のことは忘れよう。
毎日、同じ行動を繰り返した。

悪意にさらされて、ゲームをして忘れる。
時々、耐えきれなくなったら1人で静かな場所に逃げる。
その繰り返しで、私の心は守られていた。
だけど、もうそれは終わりだ。
『じゃあ、俺と一緒に行こう。』
あの日に私の繰り返しを壊した声で、夢は終わった。

女性は布団から上半身を起こして、夢について思いをはせる。
「15キロも離れていた場所を4時間前後で往復するのは、おかしいと思うのだけど…」
継国縁壱がいた宿は千景の村から山をいくつか超えた先の村にあった。町の中かつて村と呼ばれていた名残のある集落だった。千景が寝ていた間に彼は父にしこたま怒られたらしく、ずっと正座をしつつも、真顔で座っている様子が非常にシュールだったのを千景はよく覚えている。
あれから数年の時が過ぎた。
最終的に、今の千景は継国千景だ。
「おはようございます。姉上。」
「おはよう、縁壱… 姉上はやめて。」
「……… 善処します。」
その間はなんだ?という言葉を千景は飲み込んだ。
身支度を整えて、朝の清掃を始めようとする千景の前に現れた継国縁壱は、現在千景の義弟である。

千景が継国の家に引き取られることが決まったのは、縁壱が千景と出会って数日後だった。
縁壱の父は人格者で、千景の実家に謝りに行き、千景の惨状を目の当たりにした。
もともと縁壱から理由を聞いていたらしく、それでも質の悪い家族喧嘩だと思ったらしい。
だが、現実は想像よりもはるかに酷かった。
縁壱の父と共に歩く千景を見る村人の視線は、軽蔑と非難しか含まれていない。
さらに、縁壱の父が千景を引き取ることを決めたのは、千景の父が発した言葉が決め手だった。
『生きてたか・・・』
心配でもなく、安心でもない。
まるで、いてもいなくても良いような言葉。
千景(実の子供)に投げかけられていい言葉ではなかった。
それから、すぐに縁壱の父は千景を連れて、その地獄(ばしょ)を出た。
その後、養子となることを千景は了承し、手続きもトントン拍子に進んでいった。
千景本人にとっては、願ったりかなったりの出来事に驚きながらも、縁壱に感謝しつつ厚意に甘えることにした。
「おはようございます。父さん、母さん。」
「おはようございます。父上、母上。」
「おはよう、2人とも。」
「フフ、おはよう。」
そして今、千景は来年から中学生になる。
血のつながりがなく、見る人が見れば、偽物と呼ばれそうな家族構成。
だが、千景にとって何よりもかけがえのない家族・・・・・

継国千景はこのとき、確かに幸せだった・・・

西暦２０１５年　４月３日

のぎわかば

乃木若葉は、目の前の少年の動作に対して、美しく無駄のない剣だと思った。

同時に、劣等感や敗北感などの普段は全く感じたことの無い感情が自分に芽生えていることにどうしようもない嫌悪を抱いた。

幼いながらも、若葉は数年間も剣を振り、居合の型を練習して今の実力を手に入れた。

同年代からはもちろん大人たちにも、一般的に天才と認められる程度には乃木若葉は優秀な剣士だったのだ。

だが、目の前の少年は初めて手にした竹刀で若葉のなじみの道場主に数回の打撃を打ち込み叩きのめした。

十にも満たない少年が行ったことに周りは騒然となり、彼の父であるらしい男性すら口を開けて固まっている。

その日、乃木若葉は自らの技など児戯に等しいと思えるような剣を視た。

本来ならば出会う事や交わることすらないはずの２人・・・ 未来の勇者である乃木若葉と理外の天才である継国縁壱は齢九つの時分にて、初めての邂逅を果たした。

ただ、邂逅といってもお互いに深い関わりを持ったわけでも、話をしたわけでもない。

若葉は縁壱の剣を見ただけ、縁壱は若葉のなじみの道場にいただけだ。

この出会いに何かしらの意味が生まれたのは、１年以上も後のことだった。

２０１４年３月３１日

２０１５年７月２０日

「スゥー、ハァー・・・ スゥー・・・ ハッ！」

構え、呼吸を整え、鞘に納まった刀を抜刀し、再び鞘に納める。

乃木若葉は夏休みに入ってすぐ、自宅の道場に入り浸っていた。

居合と素振りをただ繰り返す。

小学生の女の子が送る夏休みとは言い難い光景が、そこにはあった。

「ひなたか・・・」

若葉がポツリと呟くように口にすると、やがて足音が聞こえ、道場の入り口から黒髪の少女が顔を出す。

「おはようございます！若葉ちゃん！」

「ああ、おはよう・・・ ひなた。」

若葉が挨拶を返した少女は上里ひなた、いわゆる幼馴染の関係である。

「また、修行ですか？若葉ちゃん、少し根を詰めすぎですよ？」

「・・・ 自覚はしてる。だけど、このくらいじゃ彼には・・・」

「追い付けない・・・ ですか？」

ひなたの言葉に、口を閉じる若葉。

無言ではあったが、その表情は焦りが浮かんでいた。

「来週から修学旅行です。今日は湯編みでもして買い物に行きましょう！気分転換も、修行の一環です！」

「・・・ ひなた、だが・・・」

「若葉ちゃんの悩みは私には深く理解できません。だけど、今の若葉ちゃんはクラスの皆に恐がられてます。・・・ 新学期が始まってから、ドンドン酷くなってますよ・・・」

去年の春よりはマシですが・・・ と付け加えられた言葉に若葉は、顔を引きつらせる。

「・・・ そ、そんなにか？」

「そんなにです！」

そんなに怖いかな?と呟く若葉に、ひなたは思わず口元を隠す。普段と違う若葉のしおらしさに、小声で笑ってしまったからだ。
「ひ～な～た～!」
「怒った顔も素敵です!若葉ちゃん!」
どこからか取り出したデジカメで写真を撮るひなたと、ひなたを追いかける若葉、道場内で騒いでいた2人に、若葉の祖母から雷が落ちたのは至極当然の成り行きだった…

「結局、ここに来てしまったな…」
ひなたとの買い物を終えた若葉が足を運んだのは、ある神社の道場である。
２つの鳥居と参道を潜った先にある拝殿、その右手前に位置する形で建てられた道場は、それなりの大きさだが、それでもまだ拝殿前の空間には余裕があり、道場の周囲で数人が素振りをしても邪魔にならない。
その道場は、以前に若葉が縁壱の剣を見た場所だ。
「もう夕方だから、誰も道場にはいないか…」
指導者の都合で道場の開かれる時間は変わるが、夏休みは子どもが昼間に顔を出しに来ることもあるため道場の持ち主によっては朝から道場を開放してくれている場合もある。
この道場は、夏の間だけ門下生以外も出入りできる便利な場所である。
とはいえ、休みに夏場の暑い道場に顔を出す人など、実家が武道や武術に関係している人物ぐらいのもので、基本的に稽古のある日以外

はガラガラの状態だった。
「流石に今から、何かするというのも閉めるときに邪魔になるし・・・」
帰るか。と若葉が呟き踵を返そうとしたときに、音が聞こえた。
ブンッ、ブンッと続けて何かを振るような音が断続的に聞こえてくる。
反射的に若葉は、音の聞こえる道場の裏手に足を運んでいた。

若葉が見たのは棍を振る黒髪の少女。
本来はそれなりの長さであるであろう髪を若葉と同じように後頭部に結い上げていた。
少女は若葉が来てからも、その前から行っていたであろう動作、右足を前に、棍を左右に入れ替えるように身体全体で回し続けている。
根を回したまま右から左へ、腰をわずかに捻り左から右へ、連続して繰り返す動きは非常にスムーズだ。
だが、不意に少女は棍の動きを止める。
「ずっと見られていると流石に気になるのだけれど・・・」
顔を見ずに告げられた言葉に、若葉はハッとして自分の状況が覗きのようであることをようやく理解した。
「す、すまない！自分も剣を振るのだが、棍の動きが綺麗だったから見とれていた！他意はない！」
「そう・・・ 嬉しいけれど、舞花棍（ぶかこん）だから大したことはないわ。」
「舞花棍？」
「ええ、棍の基本よ・・・ 私は継国千景。ここには父の付き添いで来たのだけれど貴女は？」
「・・・・・ 乃木若葉だ。」
笑いかけてくる少女、千景に若葉は少し遅れて返事を返した。

「なるほど、道場の人と顔見知りだったのね・・・」

「はい、千景さんは高知の神社の娘さんなんですね。」
千景が鍛練を切り上げると、自然と打ち解けた2人は、道場の縁側にて休憩がてらの談話に興じていた。
「年上ではあるけど、呼び捨てで構わないわよ、乃木さん。同年代なのだし…」
「いえ！千景さんは同年代には見えないくらいに落ち着いていますし、難しいです。」
そう… と千景は若葉が敬語を使うことを、呆れながら了承した。
「あの、千景さんはどうして棍を？」
「… そうね。少し面倒な話になるけれど、良いかしら？」
「は、はい！」
一瞬、考えるように黙った千景に、若葉は少しだけ緊張しながらも、肯定的な答えが返ってきたことに安心する。
「乃木さん、貴女は何かに選ばれた人間っていると思う？」
「…… 正直、わかりません。」
漠然とした千景の問い掛けに、若葉の頭に過ったのはかつて道場で起こった出来事。
選ばれた人間というものが何かはわからない若葉が、唯一理解しているのは、自分よりも優れた誰かが存在しているという事実のみ。
だからこそ若葉は、千景の問い掛けにわからないと返した。
「ただ、自分は何かに選ばれた人間ではないと思います…」
「そう… 貴女は真っ直ぐなのね。」
千景は俯きながら答えを返した若葉を労うようにそう口にした。
「乃木さん、私は何かに選ばれた人間はいると思うわ。」
「… そう、ですか…」
「けどね…」
千景の言葉に、途切れ途切れ返した若葉の言葉を遮るように、千景は立ち上がり、根先で地面を鳴らす。
「選ばれた後でどうするかは、自分自身で決めるモノよ。誰かや何かに左右されるモノじゃないわ。」
「後、ですか？」

「ええ、ゲームみたいに王様に勇者に選ばれて、世界を救って終わり・・・ じゃないもの。
私たちは、後の事を考えなきゃいけない。まぁ、今は選ばれたのどうだのを考えるような世の中じゃないけどね・・・」
「あの、千景さんはそれでも選ばれた人間がいると？」
「ええ、思ってるわ。」
断言した千景の顔は確信の籠った表情で、若葉はシンパシーのような親近感のようなものを感じていた。
千景もまた、痣の少年のような自分には届かない場所にいる誰かを視たのではないだろうかと・・・
「話を戻すけど、私は根を学ぼうと思ったのは、ある日不思議な棍を手に取ったからよ。」
「へ？・・・・・ ふ、不思議な棍？」
大真面目な顔で説明する千景に、理解が追い付かない若葉は、首を傾げながら何とか返事をした。
「ええ、鉄みたいな感触なのに、異様に軽くて、手に馴染む黒い棍。銘は『黒閃』。私はその棍を自由自在に使いこなしてみたくなったのよ。棍を振り始めたのは、そんな理由。」
不敵に笑いかけてくる千景を見て、若葉は思う。
継国千景という少女は、黒い棍が自分を選んだと思っていて、その上で千景もまた棍を手にする道を選んだのだと・・・
「それが千景さんのおっしゃられた、自分自身で選んだモノですか？」
「そうよ。貴女から見てどう感じるかしら乃木さん・・・
私の選択は？」
千景の声に若葉は返事をしなかった。
いや、返事をできなかった。
乃木家の家訓である『何事にも報いを。』の通り、乃木若葉は何者であっても行動には、必ず返ってくるものがあると育てられた。
良く言えば素直で純粋。
悪く言えば頑固で偏執。
報いを度外視した行動を乃木若葉はできない。

乃木若葉が普段行っているのは、自身の意志による選択ではなく、行動による報いの肯定。
何者であっても、その行動による未来(結果)が自身にとって、納得できるものでなければならないという、強迫観念にも似た妄執である。
この事実を若葉は自覚すらできていない。
だから、自分が想像できないようなことを選択肢に上げることもない。
結局、乃木若葉は継国千景と平行線だ。
千景が何にも左右されない道を選択しているならば、若葉は報いに左右されて道を歩いている。

しばらく黙り込んでいる若葉を見て、千景は静かに話しかける。
「この辺りは電灯は少なかったから明るい内に帰った方が良いわ。私はまた、夏休み中に此処に来るわ。その時、また話しましょう乃木さん・・・ 返事を考えてくれてるみたいだから、待ってるわ・・・」
若葉は千景の言葉に頷きながらも、自身の思考に没頭していた。
その後若葉は、半分呆けたままで家路に着いた。
その後、若葉が修学旅行に向かう前に、2人がもう一度会うことはなかった・・・・・

正史では、あり得ることのない出会いと会話によって生まれた2人の勇者のつながり。
この数日後、乃木若葉は神に選ばれた勇者となる。
自身にとっては未知の存在に選ばれた若葉は、千景の言葉を思い出す。
千景や縁壱との再会、新たな勇者との出会いが彼女の運命を加速させる。

どいたまこ

世界は随分変わった。
星が降った夜、神に選ばれた少女達は、一部が力と同時に立場を得た。
彼女達の幸運は、本当の意味で自分達の立場を自覚できている仲間がいたこと。
世界が既に神代に回帰し、現代において神と呼ばれていた災害と戦う絶望的な立場を…

２０１５年１０月１日

「星屑の進行がなくなった？１０月になってから、急にですか？」
『はい、８月から９月は結界が有っても、それなりに星屑が侵入して来ていたんですが… 最近は全く侵入がありません。理由は不明です。』
「わかりました。こちらでも調べてみます、白鳥さん。」
『よろしくお願いします、乃木さん。では、今回の通信はこれで…』
「はい、勇者通信を終了します。また、来週に…」

若葉は、そう言って、プツッと通信装置の電源を切ると同時に溜め息を吐いた。
「予測不能の星屑の動き… か。」
西暦２０１５年、乃木若葉１１歳は丸亀城にて訓練の日々を送っていた。
訓練と言っても、現在は互いに壁があり、仲間との連携やコミュニ

ケーションはまだ十分に取れていない。
そんな現状に若葉は焦りを感じていた。

７月３０日、天から白い異形の怪物『星屑』が降り注ぎ人類と人類の創造物を喰らい、破壊した。
その際に、若葉を含む何人かの少女は武器と不思議な力を得ることで窮地を乗り越えた。

若葉が現在いるのは、香川県の丸亀城。
四国は、星屑の襲来時に出現した神樹と呼ばれる神の集合体が張った結界に護られ、勇者と神樹から神託という特別な啓示を受ける巫女の一部が丸亀城にて協同の生活を送ることを決められている。
その協同生活を決めたのは、四国内の神社が代表格を集め、神樹を奉ることを是とした組織「大社」である。
若葉達は、大社にて勇者と呼ばれ人類の最後の希望という扱いを受けている。
「千景さんに皆を集めてもらおう。星屑の動きは私だけに留めておく情報ではない。」
呟いた若葉は、通信室から静かに立ち去った。

「はっ！」
千景は棍を真っ直ぐ正面に振り下ろす。
だが、棍によるしなりを持った一撃は、ガキンっと金属音を響かせ

ながら旋刃盤に受け止められる。
「フン！タマも流石に千景の攻撃にはもう慣れたぞ！今度はこっちガハッ!?」
　頭上に対する攻撃を旋刃盤で防いだことで、お腹を棍で突かれた少女、土居球子は激痛によって悶絶する。
「・・・ひ、卑怯だぞ！千景！お腹を突くなんでぇ！」
　涙目で抗議の声を上げる球子を、千景は冷静なまま見ていた。
「土居さん。貴女は良くも悪くも単純過ぎるのよ・・・前に私たちが星屑と戦えたのは、相手が人類全体を狙ってたからよ。今度は私達に人類を滅ぼした全てが向かってくるわ。その時に一方向だけを見てて殺られましたなんて言い訳はできないわよ。」
「ムゥー・・・」
「むくれてもダメよ。私は貴女より強いから、貴女と模擬戦をするときは手を抜かないわ。」
「そういうのって、普通は手を抜くんじゃないのか？」
「大丈夫よ。大きなケガはさせないから・・・」
「大丈夫なことが１つもない！」
　騒ぐ球子とあしらう千景、丸亀城の修練場にて名物に成りつつある風景。
　そして、修練場にはそれを見ている人物が数人いた。
「タマっち、ちゃんと訓練しないと危ないよ？」
「けいちゃん！今度、またワタシとも組手しよ！」
　伊予島杏と高嶋友奈、若葉、千景、球子と同じく神樹に選ばれた勇者である。
「だってさー！千景のやつ、タマにだけ容赦無さすぎるだろ！頭を棍で殴りまくったり、腹突いたり、足払いして転ばせたり！鬼か！あと、タマっち先輩だ！」
「土居さん・・・言っておくけど貴女が成長すれば、無傷で済むのよ。」
「だから！武道やってたのは、若葉と千景と友奈の３人なんだからもっと手加減しろよ！」
「タマっち、千景さんはちゃんとタマっちが怪我しないようにしてく

れてるよ。若葉さんとか友奈さんとの模擬戦見てるでしょ？」
「うぐ・・・ ぐっ！確かにそうだけどさ！」
「ワタシ達、そんなにケガしそうな模擬戦してたかな？」
「いえ、友奈さん。怪我をしそうな・・・ という訳ではないんですが・・・」
杏が歯切れ悪く口にした模擬戦に、千景は心当たりがあった。
1ヶ月前、丸亀城に勇者と呼ばれ始めた5人と巫女が集った頃。
若葉が千景の力量を見たいと模擬戦を提案し、友奈もそれに便乗したことで、模擬戦は三つ巴となった。
そこからは控えめに言って、かなり問題のある内容だったと千景は思う。
模擬戦中に、若葉と千景は勇者の力で修練場の壁を抉り、友奈は修練場の床にクレーターを作った。
それを見ていた球子と杏は、武道に通じている3人にトラウマに近いモノを持ってもおかしくはないと千景は思う。
だが、もちろん修練場が破壊されたのは、勇者の力をコントロールできずに使用したことが原因である。
「あの時は自分の身体能力が底上げされてて、少し浮き足だってただけよ。」
「ワタシも手加減するの苦手だし、若葉ちゃんとけいちゃんが強かったから、おもいっきり戦っちゃった・・・」
「大丈夫よ、高嶋さん。誰もケガをしなかったんだから。」
「タマタマ運良くだから、良くはないと思うんだが・・・ いだぁ！」
シュンとする友奈を慰める千景。
そこに、余計な口を挟んだ球子を棍で突いた千景は、球子に目で黙っていろと伝える。
先程の突きよりは痛くはなかったが、それでもぞんざいな扱いに球子はまた涙目になるが、これは球子と千景が出会ってからの行動の積み重ねによるものが大きく、実は球子の自業自得だったりする。
例えば、千景がゲーマーということを知り、唐突に部屋に突撃したり、脱衣場で千景と杏の下着のサイズを比べて無自覚に千景を煽った

り、千景の修練中にいたずらをしたりなど、千景の中で球子の評価はかなり低い。
ただ、それでも球子の千景の評価は高い。
千景は怒った後に、球子が反省して謝れば許してくれるからだ。
だから、球子は一度怒られたいたずらをしないし、千景に訓練で痛めつけられても、笑って許す。
ただ、無自覚に煽る行為だけは別で、千景は球子のその部分が苦手なのだが、球子はそれに気付いていない。
「失礼します。」
４人のいた修練場に、礼儀正しい所作で入室したのは乃木若葉。
５人の中で、仮のリーダーに任命された勇者である。
「皆さん、揃っていたんですね。少しだけ時間をもらえないでしょうか？」
「勇者通信の後ということは、諏訪からの情報か、連絡かしら？」
「はい、千景さん。現在の星屑の動きについてです。」
４人を見渡しながら紡がれた若葉の言葉に、杏や千景の顔には緊張が生まれる。
５人の勇者の中で、明確な脅威や危険を理論として説明できる２人は星屑の動きが今後に及ぼす影響の大きさを理解していた。
ただの小学生には必要がなかった頭の回転の早さによって…
「なら、乃木さん。汗を流してから… そうね３０分後に教室に集合でどうかしら？」
「そうですね。風邪を引いたら大変ですから… 自分は先に行って情報をまとめておきます。」
千景の提案に頷き、修練場を去る若葉。
アッサリとした対応に、相変わらず不器用な人だと千景は思う。
若葉と千景の再会はお互いにとって予想外に過ぎる出来事だった。
若葉は千景に会うなり「まだ答えが見つかっていない…」と律儀に口にし、千景は答えがなくてもかまわないと特に気にしなかった。
７月３０日から数ヶ月、少女達が守った命があった。
だが、守れなかった命の方が数は圧倒的に多い。

乃木若葉は勇者の中で、平等と公正を最も重んじている少女であり、それが何事にも報いをとの信念に紐付いている。
背負うべきモノを背負うことは善いことだが、背負う必要のないものを背負うことはただの傲慢だと千景は思う。
子供らしくない思考だが、きっと子供らしい生活を数年もの間できなかった代償だと自らを皮肉って千景は溜め息を吐きたくなった。
「おーい千景！シャワー早く浴びないと、髪乾かせなくなるぞー！」
「・・・ 今いくわ！」
千景は、暗い思考を切るように投げ掛けられた球子の声に返事をして、此方のことなど気にしないような球子の明るさに呆れながら彼女の元へと向かっていった。
その顔に薄い笑みを浮かべながら・・・

土居球子は学校の成績で言えば、座学は得意ではなく、体育等の身体を使った授業の方が得意で好きだった。
さらに、男の子のようにカッコいいものへの興味が強い。
もちろん、可愛いものが嫌いな訳ではなく、ただ自分には似合わないという、なんとない理由で深く可愛いに触れないようにしていただけの普通の女の子。
それが、土居球子だ。

現在、球子は旋刃盤『神屋楯比売(かむやたてひめのみこと)』に選ばれたことで勇者と呼ばれるようになった。
だが、球子個人としては選ばれたことは理解できないからどうでも良く。
大切な誰かを守るための力を得たことが重要だった。
そして、球子の守るべき大切は、同じく勇者と呼ばれる今の仲間達と出会うことで増えた。
「ちょっと、土居さん。まだ動かないで・・・」
「大丈夫だって千景・・・ タマの髪は短いからほっといても直ぐに乾くぞ。」
「はぁ・・・ 貴女は女の子なんだから、もっと身嗜みを女の子らしくしなさい！とまでは言わないけど、まだ女の子であることを諦めるのは早いと思うのよ・・・」
「どういうことだ？」
「これから女の子らしいことが気になるかも知れないでしょ？恋とかオシャレとか。」
「ハハハ！タマに限って有るわけないだろ！」
髪をタオルで拭いてくれる千景の言葉を、笑って一蹴する球子。
それは球子の本心だった。
自分に恋やオシャレなんて言葉を実践する日は来ないだろうという確信からの言葉。
だが、同時に杏ならともかくとも思う球子。
伊予島杏は可愛らしい少女で、母性的な少女だった。
球子が星屑に初めて襲われた時に、出会った大切の1人が伊予島杏だ。
自分とは違った綺麗な髪とフワフワの優しい雰囲気、自分にはないものを持っている彼女を球子は守ってあげたいと心から思った。
「まぁ、世間で言う女の子らしさで言うと、私もゲームと鍛練をしてる時点でらしくないけどね・・・」

「千景はいいんじゃないか？綺麗な髪してるじゃんか！」
「女の子らしさって、きっとそういうのじゃないわよ？」
「タマには難しいな！」
だから解んなくていいや！と笑う球子に千景は、溜め息を吐く。
球子は理解できないことを、理解しなくても良いとは思っていない。
だが、理解する必要を感じないなら、何も問題ないだろうと思っている。
「ほら、終わったわよ。」
「おお！ありがとな千景！」
球子はいつものようにヒモで結ばれた髪に機嫌を良くする。球子は自身にはいない姉妹について、姉がいたら千景みたいに優しくて、妹がいたら杏のように可愛らしいのだろうと、いつも思う。
会って数ヶ月の付き合いだが、喧嘩した回数は小学校の友達だった者や、親以上になったかも知れない。
それくらい喧嘩ばかりした数ヶ月だった。
「なぁ千景、家族と連絡してるか？タマはすっかり忘れててさー…怒られた！ハハハ！」
「笑うところなの？まぁ、私も毎日連絡をしてる訳ではなくないけど、月に2度くらいね。」
「千景は真面目だなー」
「そういう貴女は変なところで子供らしくないわよね？普通は親と数ヶ月も離れたら、ホームシックにならない？特に今は…」
そう、世間が沈んで治安が悪化している今、子供が親元を離れることは並大抵の精神力ではできない。
千景は義理の親がいるが、親という存在がいても1人であった時期が長かったために寂しさや辛さに慣れてしまっただけ…
杏は病院での生活が長かったために、親に迷惑をかけないようにと自立への意識が強まっただけ…
友奈は親を亡くして、自立せざるを得なかっただけ…
幸いにも、若葉と球子は親が生きている。

ならば、甘えたくなることもあるはずだと、千景は考えていたが、若葉は普段から自立を促されていたらしい。
小学生への教育として正直どうかとも思うが、自分の実の親よりは万倍もマシだと千景は納得はした。
だが、球子は違う。
千景から見た土居球子は特別自立を促されたわけでも、寂しさなどの慣れなくても良い感情に慣れた訳でもない。
現状を本能的に受け入れて、やるべきことに力を注いでいるだけだった。
稀有な性質を持つ球子は、勇者に選ばれた中で最も勇者らしいと千景は思う。
「タマはホームシックにならない！千景や杏、友奈と若葉がいるからな！わかったら教室まで競争だ千景！」
「は？・・・ちょっとせっかくシャワー浴びたのに！」
千景が静止する間もなく球子は走り出していた。
「縁壱にも見倣ってほしい積極性かも知れないわね・・・」
いつも物静かな弟を思い浮かべながら、呟いた千景は溜め息を吐きつつ小走りで球子の後を追った。

縁壱と球子が出会うことで起きる一騒動で、千景は頭痛を覚えるのだがそれはまた別のお話である。

いよじまあんず

「もしかして、神無月・・・？」
　諏訪からの報告を受けた若葉の話を聞き、杏が呟いた言葉が教室で静かに響いた。
「確か、１０月の古い名前で神様が出雲、島根県に集まることで神がいなくなる。だから神無月・・・だったかしら？」
「はい・・・だけど、人間を滅ぼしかけてるこのタイミングで神様が集まるのに意味があるのかな？でも、そもそも神無月だって決まったわけじゃないし・・・」
　１人で思考に没頭し始めた杏に、球子は手を振って見るが杏の目は既に目の前の景色を見ていない。
「こうなると杏は長いからなーどうする若葉？」
「伊予島さんの情報は頼りになる。私はそもそも神無月のことを知らなかった。」
「タマも知らなかった！」
「ワタシも、ワタシも！」
「何で無知を堂々とした態度で口にできるのかしら？」
　３人の言葉に千景は額を押さえるように、溜め息を吐いた。
　千景とて、ゲームの知識や神社でも知識でかじっていただけで、杏のように本を読んで自分で調べた訳ではない。
　そもそも、杏の小学生離れした知識量が凄まじいだけで、普通の少女は旧暦など偶々知るくらいが当たり前である。
「まぁ、伊予島さんは置いておいて、星屑がいない場所が何処までなのかは気になるわね。諏訪から四国、逆に四国から諏訪への移動を行える最後の機会かもしれないし・・・」
「結界外の調査をしようにも、諏訪で不測の事態に対応可能なのは、白鳥さんだけ。周辺には星屑がいないことしかわからないらしい。」
「じゃあタマ達が行くのはどうだ？」
　球子の言葉に杏以外の全員が視線を向けた。
「現実的だけど、諏訪まで途中の道で寄り道はできないわよ。何が

あっても…」
「ッ…　千景さんの言う通りだ土居さん。もし、作戦を行うなら伊予島さんと千景さんが適任だと私は思う。星屑のこと以上に、判断力が必要になる。撤退のタイミングも含めて…」
「だけど、若ちゃん!・けいちゃんとアンちゃんだけじゃ!」
勇者の力を使えると言っても、子供が5人。
心身の限界を知らない子供が危機的状況に陥れば、待っているのは破滅である。
千景の言葉の裏には、道中で救助できる人間が見つかっても何もしない。
してはいけないとの意味があった。
この場で正確に意味を察することができるのは若葉と杏のみ。
受け入れがたい言葉をあえて口にすることで悪者になろうとするのはどうかと思ってはいるが、千景が、誰よりも冷静で現実的であり、優しく厳しいことを若葉は理解している。
だが、それでも助けられるのなら助けたい。
それが、乃木若葉の本音だった。
言い争いが起こりそうな瞬間にその声が響いた。
「私と若葉さんで諏訪に行きましょう。」
普段より少しだけ凛とした声が、部屋に響いた。
「なぜ、私と伊予島さんが良いと?」
「実力的に若葉さんなら不測の事態に対応できます。私と千景さんが出向いてしまえば…その、あの…」
ぎこちなくなる杏に、若葉、友奈、球子の3人は首を傾げる。
ただ1人、千景だけは納得したように、杏を見ていた。
「私も伊予島さんに賛成よ。もしもの時、どちらにも無茶を止められる人はいた方がいいもの。」
「でも、一番無茶なことするの千景だろ…」
「なにか言ったかしら?・土居さん?」
「いっえふぁい!・わるゅかったよ!」
余計なことを口走った球子の頬を引っ張る千景に、直ぐに謝る球

子。
いつも通りの2人に安心したように、3人は笑う。
そこから杏は、いくつかの説明を始めた。
「まず、本来の神無月の期間を考えたときに、今回の星屑の動きそのものが不測の事態です。」
「…本来の神無月？」
「さっき10月のことを、古い呼び名で神無月と言ってなかったか？」
「すみません！少し間違ってました。旧暦の10月を神無月と呼ぶのは間違いではないんですが…」
本来、旧暦の神無月を現在の暦に当てはめた際、10月の下旬から12月の上旬までの間に当てはまることが多い。
「なるほど。つまり今回の件は、期間が早まっている可能性がある…と。」
「はい。付け加えると、神無月の伝承はあくまで後付けの部分も多くて信憑性は薄いんです。神様が人間の創った話に合わせるのもおかしな話ですし…」
さらに神無月の間に、ずっと神が1ヶ所に集まる訳ではなく、一定の期間が存在し、その間のみ神は出雲におり、星屑も現れなくなると仮定できる材料もない。
「仮定を立てたとして、前提が神無月の元になった祭りが神の間で行われている。その祭りは人間を滅ぼす気まぐれな前祝いである可能性と、人間を滅ぼすことが神の間で決まっていない会議のようなものである可能性、2つが考えられます。」
その後、言葉を切り、前提が間違っており、まったく別の理由で星屑を退かせた可能性、罠である可能性もありますが…と自信無さげに杏は付け加えた。
そのすべてを考えた上で、杏が最終的に口にしたのが行動することだった。
「神無月であるかどうかが不明という点を除けば、好機ではあるわね。」
「賭けではありますけど、星屑がいないなら私達が動けば諏訪には直

ぐに着けます。往復も1週間あれば可能です。勇者の力なら！」
「問題は大社と社会の方ね…」
千景の言葉に杏は俯く。
星屑が襲来しておらずとも、星屑を恐れる声は多い。
その証拠が天恐…正式名称「天空恐怖症」という新たな病の発生である。
空、すなわち天を見ることができなくなる病、発症者には星屑が天から降り注ぎ人を喰らった光景を直視した者が多く、外に出れないため家に籠りきりになる。
勇者はまだまだ人々の支えになる程の知名度はないが、星屑に対抗できる力だけは7月30日、星屑が降り注いだ日に既に証明されている。
千景や杏の懸念は、現段階で大社が勇者を壁の外に出ることを許可するかどうかであった。
「それでも大社には私達の考えを伝えよう！白鳥さんが四国に来てくれれば、今後への安心にもなる筈だ！」
若葉の真っ直ぐな言葉に、千景は内心で切り捨てられる人々のことを考えた。
諏訪にも生存者はいる筈だ。正確な人数はともかく、勇者が数人で守りながら四国に送り届けるのは難しい人数であることは間違いない。
おそらく、杏も気づいている。その上で、若葉に伝えるかを決めかねているのだ。
この決断は、勇者同士の関係にヒビをいれかねない。
千景が悩みつつも、その日の話し合いは最終的に大社の上層部に意見を伝え、早めに動けるように準備をしておくことが決まった……

―――――――――――――

伊予島杏は純粋な戦闘能力は勇者の中で最も低い。
だが、その知識量と思考は周りの大人に非凡さを感じさせる程に成熟していた。
杏本人は、千景と比べると大したことはないと言って憚らないが、千景から言わせれば杏は選ばれた人間の1人だと断言できる。
例えそれが、本人が望んでいない才であったとしても……

「千景さんはどう思いますか？もし、大社が作戦を了承した時、他の人に話すべきだと思いますか？」
「……私の答えを聞く前に、貴女はどうなの伊予島さん？」
杏の部屋、杏と千景は2人だけで、顔を見合わせていた。杏が千景を呼び出したためだ。
「私は、話すべきではないと思います。若葉さん達は、すべて救うつもりです。救えるかどうかを考えずに…」
「そうね。勇者らしいわ。」
「だけど私は、全部救えると言えません。責任を持てません…」
そう言って俯く杏は、見た目道理の子どもだった。
いくら大人っぽい話し方で隠しても、杏も千景も子どもでしかない。
どれだけ小学生離れした思考力と価値観を確立させていても、他の生命に対しての決断に責任も覚悟も持てない。
彼女達は中身が無いままに、立場という器だけを持ってしまった。
杏は勇者になった日に、球子に勇気を貰ったが、それは救う生命を切り捨てるための勇気などではなく、ただ立ち上がる為だけのモノだった。
「私は伝えるべきだと思うわ。」
「…千景さん？」
頭を撫でられた杏は、千景の目を見た。
ソコに合ったのは慈愛と心配。

「1人で考えすぎよ伊予島さん。私達は子供だもの、できないことの方が多いのは当然よ。」
「だけど…！」
「救えなかったら、その時に皆で落ち込みましょう。救えたら、皆で喜びましょう。責められるなら…皆でよ。3人ともお人好しだもの、大丈夫よ。一緒に怒られてくれるわ。だから…1人で泣くのは止めなさい。」
「あ…」
　杏の頬を温かいものが流れていく。
「…ぐっす…えっぐ…ち、がげさん！」
「大丈夫よ。大丈夫。」
「…う…えっぐ…うぁぁーんっ!!」

「今の世界で、頭が良いと損をするわね…」
　皮肉げに呟く千景は、泣きつかれて眠る杏の頭をソッと優しく撫でた。

　その日、伊予島杏は望んでいない才に苦しめられつつも、1歩前に踏み出し、最も望んでいたモノを手にした。
　彼女の才は更に高められていくことになる。最愛の仲間達のために……